

月報	日本キリスト改革派 横浜中央教会	10月号 2011年10月16日
----	---------------------	---------------------

小さな喜び

K. Y

よろこびが集ったよりも
悲しみが集った方が
しあわせに近いような気がする

強いものが集ったよりも
弱いものが集った方が
真実に近いような気がする

しあわせが集ったよりも
ふしあわせが集ったほうが
愛に近いような気がする

星野富弘：風の歌より

今、私たちの国では大変深刻な地震、津波、放射能による被害、さらに加えて夏には台風による大きな被害も受け、試練の時となっています。また、個人的にも今年は辛いことがいろいろと重なり、気づいたらふっーと心が弱くなりそうな自分がおりました。そういう時にはただただお祈りをして、「きっと神様がよい道を備えてくださるだろう。」と思い込んで気を取り直すのです。神様は祈りで求めたようにちゃんとそのようにしてくださいませ。試練の中にも、「よかった～」と思えることを用意していただきます。心配ごとがない時だったら、あたりまえすぎて気にも留めないような小さな喜びが、折れそうな自分をどんなに強くしてくれることでしょうか！そういう神様のサポートを感じられるのです。自分に与えられる恵みにもっともっと敏感になり、感謝することを数えていくと自分の中にも優しさが広がっていくような気がします。逆に悲しいことばかりを数えていると負の連鎖に押しつぶされそうになります。しあわせの中にある時にはそれに気付くのに疎く、困難な状況の中にあつてあらためてそれに気付くなんて、愚かですよ。

心配ごとに自分の心を占領されてしまいそうになりながら9月を迎えていた頃、そんな中でも神様の確かな導きに支えられ前向きになれた時、ちょうど自宅に届けられた冊子の中に星野富弘さんのこの詩を見つけ、通じるものを感じました。このタイミングに神様のお計らいを感じるのです。

あれから一か月経ち、10月を迎えました。一日一日に重みを感じる今日この頃ですが、あたりまえの恵みに慣れないように、ごく小さなしあわせにも敏感でいて、感謝ができるようにと自分に言い聞かせています。

私の子どもの頃、長姉がミッションスクールに通っていましたので、家に帰ると何時も讃美歌の練習をしていました。私は意味が分からぬまま門前の小僧で歌っていました。

小学校三年生の音楽の時間でした。「今日は講堂の壇の上で一人ひとり自分の一番好きな歌をうたってください」と言われ、終戦直後のことで童謡や軍歌を歌う子が多かったのですが、私は断然好きだった「きよしこのよる」を歌いました。するとフランス人に似た素敵な音楽の先生が「あなたは良い歌を知っているのねえ、誰に教わったの？」と聞いてくださったので嬉しくなり、さっそく姉に報告したら、「この歌はね、クリスマスの寒い時期に歌うもので、こんなカンカン照りの日に歌うものではないのよ」と教えられ、この時初めて「クリスマスとは？」「キリスト教とは？」を知ったのでした。

私の父は陸軍大尉でしたが、ある日を境に反戦を唱えるようになり、どこで聴いて来るのか「キリスト教の説教はみな真面目だよ」と言うようになり、次女もミッションスクールに入れ、仕事のかたわら戦争遺児の面倒をみていました。そんな父の苦しみを知らずして、私は温ぬくと讃美歌を歌っていたのでした。

四十路の過ぎる頃、大学の学生寮に赴任しました。毎朝守る礼拝の、讃美歌選びが楽しみの一つでした。地方から出て来た学生達が初めて讃美歌に出会うのですが、3ヶ月を過ぎる頃から、リクエストを出して来るようになり、中には「ホームシックになりそうだけれど讃美歌を歌うと慰められ、元気が出てきます」と言う学生もいて、事あるごとに歌いました。ちなみに彼女達の好きな歌は、312番「いつくしみ深き」、310番「しずけきのりの」、298番「やすかれわがこころよ」などでした。

古来希なり、の年になり体のあちこちが、がたがたして来て、早朝のウォーキングが欠かせなくなりました。三角形の型をしたメタセコイヤの並木道を通る時、自然に讃美歌が出てきます。緑深い公園の空気は、かすれた声も心も浄化して、今日の活力を私に与えてくれるのです。全てを治め、導いてくださる神に感謝して、主の尊き御名をほめたたえます。

「聖隷横浜病院・横浜エデンの園祈祷会」について

K. Y

私の現在勤務している聖隷横浜病院は、聖隷福祉事業団という社会福祉法人が設立した病院ですが、聖隷福祉事業団はその基本理念として、**キリスト教精神に基づく「隣人愛」**を掲げています。聖隷横浜病院は、以前は国立横浜東病院でしたが、国立病院の統廃合により、2003年に聖隷福祉事業団に経営移譲され、設立されました。基本理念にキリスト教の文字がありながら、礼拝や祈祷会は現在まで行われていません。

聖隷横浜病院に通院中・入院中の患者さん及びそのご家族の方々、及び横浜エデンの園（介護付き有料老人ホーム）の入居者の方々は、病の為に、苦しみ、悲しみの中にいます。聖書の中に「あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせて下さいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦して下さいます。」（ヤコブの手紙5章14-15

節) とあります。隣人愛を説いたイエス・キリストは、宣教と共に病や苦しみを癒やされました。

マタイ 9:35 には、「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。」とあります。通院中の患者さん、患者さんのご家族の中にも様々な苦しみ(身体的、精神的、社会的苦痛)をかかえている方々が多くいらっしゃるのではないかと思います。そこで、患者、患者家族、病院スタッフが共に神の前に静まり、祈ることにより、心の平安を得ることが出来ればと思い、「聖隷横浜病院・横浜エデンの園祈祷会」を計画しています。

現在は場所や時間等、具体的な事柄を検討中の段階です。是非、この計画が主の御心に沿った形で実現し、定期的に祈祷会を開くことが出来るようにお祈り下さい。

Summer Days に参加して

K. I

私は 8/9~12 で全国高校生キャンプに参加してきました。プログラムは多くの参加者全員と交流するための企画で盛りだくさんでした。日中は遊びがメインですが、朝晩は礼拝がありました。礼拝で聞いた先生やスタッフの方々の話をよく考え、その後に部屋別で自分たちの意見や感想を分かち合います。この時間は私も学んだことがたくさんありましたし、悩み事なども少しは軽くなったと思います。これは参加した高校生みんなが感じたことだと思います。なんといいても、SDに参加するとクリスチャンの同世代が全国にあんなにたくさんいることに驚きと喜びを覚えます。同世代の人の考え、意見に刺激されることで、自分ももっとキリスト教について知りたいと思えるようになるのだと思います。それが、SDに参加して信仰告白をするに至った高校生が多い理由だと私は思います。最後に、キャンプに参加できたことを感謝しています。

以下は全国高校生キャンプの報告号に載せた原稿です。

今年は私にとって最後のSDでした。高1から参加していたので、3回目となりましたが、今回が一番神様のことを考えながら過ごすことができたSDだと感じています。夕べの集いや部屋別デボーションで先生方やスタッフの方達が自分の過去や考えを打ち明けてくださったことには、私も学ぶことがたくさんありました。高3なので最近では進路について考えることが多かったのですが、神様はいつも私の味方でいてくれること、それも最強の！味方であることを改めて信じることができました。この先どんな試練が待ち受けていても、このことを思い出して頑張ります。

毎年SDに来てうれしいことは参加する度に新しい友達がいっぱい増えることです。教会には卒業というものがないので、一生友達でいられます。そんな仲間が全国にたくさんいることは、とても幸せなことだと思います。また、キャンパーだけではなく、スタッフのみなさんの存在も私にとって大きなものです。暑い中働いてくださったり、高校生のことを第一に考えてくださったり、感謝でいっぱいです。私も来年からは、今までSDでもらってきた分を倍にしてこのキャンプのために奉仕したいです。ありがとうございました。